



事例
高千穂大学

専任教員によるアドバイザー制度で4年間を一貫サポート

藤井 耐 学校法人高千穂学園 理事長
高千穂大学 学長

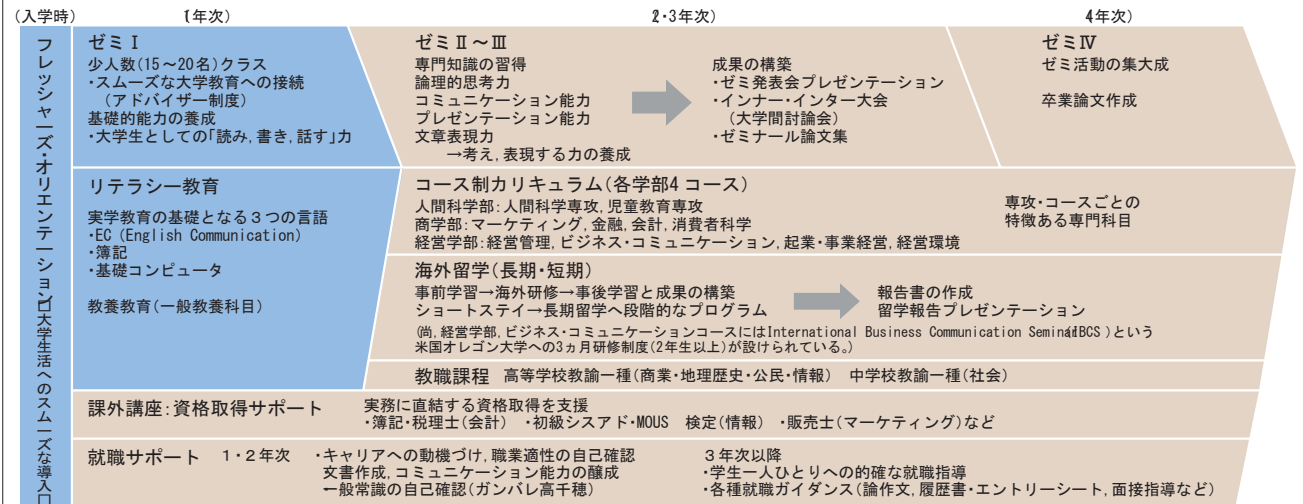
本学では、建学の精神である、「家族主義的教育共同体」のもと、理事会・教授会・事務局、そして、同窓会・父母の会が「五位一体」による有機的な学生支援システムを構築し、学生一人一人が、「自立的・主体的個人」として、同時に、「他者との共生的組織活動を可能ならしめる社会的存在」として成長することができるよう、その主な手段の一つを初年次教育のあり方に求め、その取組みを既に開始している。

その経緯は、私が学長に就任した平成13(2001)年度約1年間に渡り、多くの議論を重ねた結果、初年次教育のキーコンセプトを「気づき(の喚起)」とし、入学当初より、学生が自らの将来の具体的な目標をデザインし、それを実現化するための具体的な方法を発見するために、初年次教育の早期導入に着手するとの意見の合意に至った。そこで、従来から継続されてきた初年次教育をさらに修正・改善し、新たな初年次教育の目標・内容として再構築したカリキュラム制度が、平成14(2002)年度から発足した「(新)ゼミⅠ」(以下「ゼミⅠ」)である。

必修3科目をゼミⅠごとに履修し、学生同士がフォロー

まず、「ゼミⅠ」を中核とする初年次教育と専門教育から成る全体カリキュラムを概観する(図1)。本学はこれまで「商学」「経営学」を中心とする学問分野の教育を通じ、社会に有為な人材を育成してきた。今日では、①簿記、②基礎コンピュータ、③イングリッシュ・コミュニケーションの3科目を1年次全学生の主要必修科目とすると同時に、初年次教育の必修コア・カリキュラムである「ゼミⅠ」単位ごとに履修するシステムとしている。「ゼミⅠ」は1クラス約15名から構成され、全学部の混合編成を原則としている。すなわち、この履修システムの狙いの一つは、本学の伝統的教育理念の一つである「少人数教育」を現代においても継続することである。これは、「ゼミⅠ」を中核とする上記1年次主要必修3科目を「少人数編成」「同一メンバー・同時履修」とすることにより、友人関係形成の機会を増やし、この友人関係構築過程において、1年次における主たる病理現象の一つとされる大学生活の不安解消の手段となることをも期待している。

図1 アドバイザー制度による一貫サポート・フォロー体制とカリキュラム概念図



1年次は、商学部ではマーケティング論・会計学総論・金融総論、経営学部では経営学総論、人間科学部人間科学専攻(平成19年度開設)では人間科学概論・ライフデザイン論、人間科学部児童教育専攻では児童学概論・児童心理学をそれぞれ学部必修科目として履修する。その他、全学部共通科目として指定した卒業認定単位科目(数)を履修・修得し、2年次へ進級する。2年次以降では、「ゼミⅠ」は、「ゼミⅡ」「ゼミⅢ」「ゼミⅣ」(ゼミⅠのみ必修)を履修することになるが、なかでも商学部・経営学部では専門の「コース科目」を、人間科学部では専門の「専攻科目」を中心に履修し、4年間を完結させることとなる。

4つの授業目標をゼミⅠで展開

本学では、1年生約600名を1ゼミあたり約15名の構成とし、40の「ゼミⅠ」が編成される。この40のゼミⅠを、任期制教員を含む専任教員のうち、一部大学院担当に伴い担当コマ数の多い教員(約10名程度)を除く、ほぼ全員が担当することとなる。

この「ゼミⅠ」の「授業目標」は、「新入生がスムーズに大学生活に溶け込める」と同時に、「4年間の大学生活に、自らが自立的・能動的にかかわることができるよう」に、この「ゼミⅠ」を「自己発見の場」ないしは、「気づきの場」として機能化させることにある。換言するなら、新入生の自立意識を醸成しつつ、①大学生活へのスムーズな適応、②スタディ・スキルの育成、③課題探求型学習態度の醸成、④キャリア

意識の発揚を主たる授業目標としている。さらに、これら4点の授業目標を達成するために、以下に述べる具体的教育(授業)内容が構築されている。

まず、①の大学生活へのスムーズな適応については次のとおりである。

a) 入学式翌日より、大学生活第一回「ゼミⅠ」授業として、「フレッシュャーズ・オリエンテーション」と呼ばれる1泊2日の合宿研修を実施する。内容としては、「ゼミⅠ研修」「ゼミⅠ対抗綱引き大会」「上級生による学生生活・課外講座の紹介」及び、「学長講話」等から構成されている。さらに、新入生の大学生活に対する不安の払拭、換言すれば、多くの大学関係者がそれぞれの立場から彼等へのサポート機能を果たしていることを確認する場ともなるように、冒頭の「五位一体」による学生支援システムを構成する理事会・教授会・事務局・同窓会及び、父母の会からの各代表者にも出席して頂いている。

b) 学生には、学長室を中心に作成した、一人ひとりの4年間の学生生活の見取り図ともいえる「高千穂マスター・プラン」及び、各年次・各セメスター毎に、学生自らが学習目標・学習計画を作成する「学生生活目標管理シート」が準備されている。特に、「学生生活目標管理シート」については、各年次・各セメスター毎の目標・計画設定時と評価時に、ゼミⅠ担当教員の面談のもと、助言を受けることとしている。これが4年間、計8回実施される。さらに、この「学生生活目標管理シート」と併行し、「学生指導記録(学生カルテ)」が用意されている。新入生は、初回の「ゼミⅠ」において、自らの

将来の目標あるいは、入学時の不安等について記載する。ゼミI担当教員は、それを参考に「アドバイザー」としての視点から学生指導に臨み、1年間経過した後、自らの所見を記入し、次年度の専門ゼミ担当教員に引き継ぐことになる。これも4年間継続されることとなる。

次に②スタディ・スキルの育成に関する授業内容についてふれることとする。これは、大学生としての基本的な学習技術、すなわち「読む、書く、聴く、話す」能力を具備させることを目的とするものである。特に、1年次春学期においては、入学前教育の一つでもある特定テーマに関する文章作成を課題とし、それを入学時ゼミI教員に提出する。ゼミI教員は、春学期を通じていかなる成長がみられたかを判断するために、この春学期終了後、新たに文章作成に関する課題を課し、その成長の軌跡を検証することとしている。また、通年の個別単位毎のゼミI授業に加えて、春・秋学期共に数回の「共同授業」(複数のゼミIによる合同授業)を実施し、「ノート・テイキング」や「傾聴力」の育成を図っている。特に春学期には、数名のゼミI担当代表教員による講演(模擬授業)が行われ、その内容についてノート・テイキングのトレーニングを受ける。一定のテーマについて各ゼミIで検討してきた結果を、他のゼミI学生を対象に発表することにより、プレゼンテーション能力の育成にも留意している。このプレゼンは、平成18年度まで各ゼミIの代表学生のみが行っていたが、平成19年度からは全学生に経験させることとした。この経験が、2年次以降の専門ゼミII・III・IVに連動するのである。

③課題探求型学習態度の醸成についてみてみよう。この授業内容は、特に秋学期において展開されることになる。秋学期授業回数15回のうち約半数の7回を利用し、各ゼミI担当教員による指導のもと、各ゼミI毎に特定のテーマ

図2 就職未決定率および進路未決定率の推移

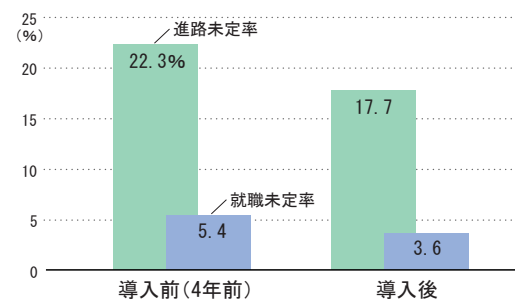
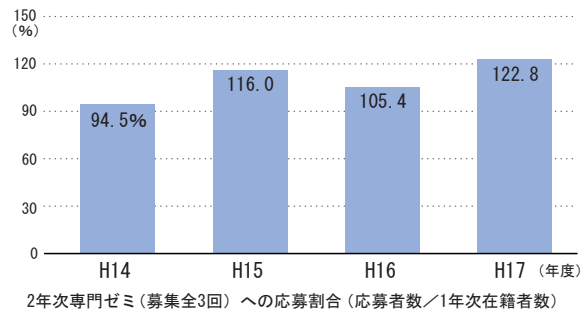


図3 2年次以後の専門ゼミへの応募率(のべ)の推移



を選択し、「論理的思考能力」あるいは、「問題発見・問題解決能力を養成すべくカリキュラムが展開されることになる。その集大成の場が、既述の秋学期「ゼミI共同授業」における「プレゼンテーション大会」となる。

最後に、④キャリア意識の発揚を目標とするゼミI授業内容を紹介する。

a)1年次5月に、学外機関により開発されたキャリア・アセスメントの第一段階である「自己発見レポート(適性検査の一種)」を活用し、入学時より、自らのキャリア形成を意識させるよう意図している。また、本レポートをさらに補完し、本学独自のキャリア教育を実践すべくキャリア形成支援の冊子を作成するに至った。ところで、この1年次にみる「自己発見レポート」は、さらに、2年次における「自己プロGRESS・レポート」そして、3年次における「キャリア・アプローチ」へと体系的に連動しつつ、個々の学生が自らの「キャリア・デザイン」を構築するためのツールの一つとして活用できるよう準備されている。

b)大学生としての基礎学力の維持・向上、あるいは、キャリア形成のための基礎的能力の向上を目的とし、国語、算数(数学)、理科、社会、英語の5教科から、専任教員が分担し、毎週2分野、各10問程度の問題を用意・作成し、学生は解答後、自主的に解答解説を受け取り確認するという仕組みを導入している。学内では、この仕組みを「ガンバレ高千穂」と呼んでいる。導入当初は、学生の自主性を尊重する意味において、問題の受け取り、解答解説の受け取り共に学生に委ねていたが、十分な活用がなされなかったため、平成19年度からはゼミI授業における統一課題とし、授業時間内解答とすることとした。

以上が、「ゼミI」を中心とする初年次教育にみる4つの教育目標及び授業内容であるが、「フレッシューズ・オリエンテ-

ション」、「高千穂マスター・プラン」、「学生生活目標管理シート」、「学生指導記録」、「ゼミI共同合同授業」、「自己発見レポート(キャリア・アセスメント)」は、これら全てが同時に有機的に連動し、統合的システムとして機能することを意図し構築されたものである。そして、この統合的システムとしての機能化は、「アドバイザー」である「ゼミI担当教員」の意思と行動により達成されることを看過してはならない。

アドバイザーは、ワークショップで研修

既述の通り本学における初年次教育(特に「ゼミI」)の主たる担当者は、「アドバイザー」としての機能も有する「ゼミI担当教員」である。しかし、本学ゼミIにみる4点の授業目標が、新入生全学生を対象とした共通目標であることを考えれば、「ゼミI授業内容」及び、「その運営と目標達成に関する学生評価(評価基準を含む)」は、可能な限り統一性がなければならないことは言うまでもないであろう。

そこで、各ゼミI担当教員の個性・特性を損なうことなく、ゼミI教育目標の共有化、ゼミI運営、授業、学生評価内容の統一化をはかるべく、幾度となくゼミI担当者会議において議論を重ね、今日では、各セマスター毎にゼミI担当者全員によるワークショップが開催され、さらなるゼミI教育の改善を継続している状況である。

ゼミI導入後は退学者が減少

初年次教育(特に「ゼミI」)の導入によりいかなる成果が生まれたかについては、軽々に論ずることはできない。何故なら、ゼミI等の制度的要因、本学の五位一体による学生支援システムを中心とする文化的要因、さらには、キャンパス内各施設をはじめとする環境要因等が有機的に連動してこそ、「学生の満足充足」あるいは、「学生の成長」が実現できるものと考えられるからである。そのうえで、あえて、初年次教育「ゼミI」導入の成果として提示できる代表的データを紹介しますと、以下の点であろう。

第一は、「就職未決定率および進路未決定率の推移」(図2)についてであるが、「ゼミI導入以後平成14年度入学生」とそれ以前4年間の卒業生との比較では、明らかに、新制度導入後の学生にみる就職未決定率(約5.4%から3.6%)

図4 退学・除籍者(率)の推移

	H13年度	H14年度	H15年度	H16年度	H17年度	H18年度
退学者合計	100	93	100	89	77	36
退学者比率(%)	3.67	3.46	3.82	3.49	3.15	1.52
除籍者	41	35	47	38	47	38
退学・除籍者合計	141	128	147	127	124	74
年度初学生数	2725	2691	2615	2547	2441	2374
除籍・退学割合(%)	5.20	4.80	5.60	5.00	5.10	3.10

※平成14年度以降が「フレッシューズ・オリエンテーション」をはじめとする「ゼミI」導入以降の数。

及び、進路未決定率(22.3%から17.7%)は、共に減少傾向を示していると言えよう。

第二は、「2年次以後の専門ゼミへの応募率(のべ)の推移」(図3)についてであるが、「ゼミI」を導入した平成14年度の1年生が2年生となる平成15年度以後、専門ゼミへの応募率は明らかに増加傾向にあると言えよう。

そして、第三は、「退学・除籍者(率)の推移」(図4)についてである。本データにおいても「ゼミI」を導入した平成14年度以後、明らかに「退学者数(比率)」は大幅に減少していると言えるであろう。尚、「除籍者数」に大きな変化がみられないのは、その原因の多くが、「家庭の経済的事情」という、今日的経済状況の問題点が大きく反映しているものと推察でき、口惜しい思いである。

就職未決定者や留年者の低減が課題

以上が、客観的・定量的データであるが、状況を一点述べさせて頂くなら、4~5年程前より初年次教育に対し全学的な取組みが開始されて以来、「キャンパス内の雰囲気」は明るく、日常多くの「挨拶」が学園内にて交わされ、まさに、本学園の建学の精神である「家族主義的教育共同体」[師弟一体]の組織文化が明らかに具現化された状況にあるということである。

なお、今後の課題について述べるなら、既述の通り、4年終了時における進路未決定率・就職未決定率は、毎年度減少傾向にはあるものの、実数としては、1学年約600名中、依然として70名程度の「就職せず」という卒業生が存在しているということ。また、就職は決定しているものの「卒業できず」、すなわち「留年者数」が90名程度存在しているという事実を直視すると、初年次教育の共通目標である「気づき(の喚起)」にはじまり、大学生生活4年間を通じ、さらなる全学的教育改善を継続しなければならないということである。